

平成 28 年度 学士論文

ハンガリアン法による語の相似関係抽出

Analogous word association and its detection by the Hungarian method.

平田 泰樹

Taiki Hirata

北海道大学 工学部 情報エレクトロニクス学科 コンピュータサイエンス
コース 知識ベース研究室

Department of Electronics and Information Engineering.
Hokkaido University

2017 年 2 月 10 日

目次

第 1 章	序論	1
1.1	はじめに	1
1.2	研究背景	1
1.3	本研究の目的	2
1.4	本論文の構成	2
第 2 章	意味表現の学習	3
2.1	形態素と意味表現	3
2.1.1	形態素	3
2.1.2	形態素解析	3
2.1.3	意味表現	4
2.2	辞書	4
2.2.1	WordNet	4
2.3	統計的手法	6
2.3.1	分布的意味表現	6
2.3.2	分散的意味表現	7
第 3 章	word2vec	9
3.1	実装アルゴリズム	9
3.1.1	連続単語袋詰モデル	9
3.1.2	連続スキップグラムモデル	10
3.1.3	二つの学習モデルの違い	11
3.2	モデルの最適化	11
3.2.1	ソフトマックス関数	11
3.2.2		12
3.2.3	負例サンプリング	12
3.2.4	階層型ソフトマックス	12
第 4 章	梅山氏の提案手法	13
4.1	グラフの同型性問題	13
4.1.1	グラフ変換	14

4.1.2	ハンガリアン法	16
4.1.3	まとめ	17
第 5 章	実験と考察	18
5.1	目的	18
5.2	実験データ	18
5.3	予備実験	19
5.3.1	梅山氏の手法の有効性確認	19
5.3.2	着目形態素の近傍形態素の様子	20
第 6 章	結び	22
参考文献		24

図目次

2.1	分布仮説による意味の類推例	6
3.1	CBoW によるベクトル構築イメージ	10
3.2	Sg によるベクトル構築イメージ	10
4.1	グラフ G、グラフ H	14
5.1	王-女王 近傍イメージ	21

表目次

5.1	テストデータ	19
5.2	テストデータのノードマッチング解析結果	19
5.3	(王, 女王)	20
5.4	(日本, アメリカ)	20
5.5	(明るい, 暗い)	21
5.6	(光, 影, 闇)	21

第 1 章

序論

1.1 はじめに

SNS などのサービスが普及し、以前にも増して世界中の人々がインターネット上にテキストデータを投稿するようになった。こうして集められるデータは、その人の趣向、動向、人と為りや、世界の動向を知る手掛かりとなるだろう。しかし、インターネット上にあるテキストデータは膨大なものになっており、ユーザーが本当に欲しい情報は見えにくく、扱いづらいものとなっている。膨大なデータを有効活用していくためには、効率的な分類、加工をしていかなければならないが、データのすべてを人手で解析し、まとめることは非常に困難である。そこで、計算機を利用してこのテキストデータを処理することがさまざまな分野で考えられている。

テキストデータを計算機で処理するにあたって、テキストを何らかの方法で数値化する必要がある。そもそもテキストを構成する文字自体は単なる記号であり、また、計算機が文字データを識別するために、文字一つ一つに事前に割り当てられている数値には、記号識別以上の意味がない。

そこで、テキストを計算機で処理するために、いかにして意味を持つ数値で表現し、どのように利用するか、が課題となっている。

1.2 研究背景

テキストを、意味を持つ数値で表現する手法について、現在まででいくつかの方法が研究されている。中でも 2013 年に発表された word2vec は、ニューラルネットワークによって学習した単語の意味表現ベクトルで、単語の和、差の計算ができるようになり話題となった。

このベクトルの加算減算が可能になったこと、形態素ベクトルの位置関係に相似性が見られることは、主成分分析、t-SNE などで次元を削減し、可視化したデータから見て取れる。

1.3 本研究の目的

本研究では、word2vec により得たベクトルデータを可視化することなしに、語の相似関係を抽出することを目的としている。

1.4 本論文の構成

はじめに本章は序論であり、研究背景に関して述べた。

本稿 2 章では、本研究で用いる単語の意味表現についての説明を述べた。3 章では、本研究で用いるベクトルデータを出力する word2vec について述べた。

4 章では、word2vec により得られたデータの解析に用いる、梅山氏のグラフノードマッチング問題に関する提案手法と、ハンガリアン法について述べた。

5 章で、本研究で行った実験の流れについて説明し、結果を検証した。

最後に 6 章では、本研究における結論と、今後の展望について考慮していることを述べて最後のまとめとした。

第 2 章

意味表現の学習

本研究では、word2vec で学習した分散表現ベクトルから語の相似関係を抽出することを目的としている。本章では、単語の意味表現の学習についていくつかの表現方法と、word2vec で取得可能な分散表現ベクトルについてを説明する。

2.1 形態素と意味表現

2.1.1 形態素

自然言語は、人と人とのコミュニケーションに用いられる道具であり、文字、あるいは音の並びによって構成されている。しかし、一般に文字、或いは音そのものは意味を持たないため、自然言語処理の場面では、最小単位として形態素を用いることが多い。

形態素とは、文字列が意味、或いは役割を持つ最小のまとまりである。本研究ではこの形態素に着目していく。

2.1.2 形態素解析

先に述べた通り、多くの自然言語処理に関わるタスクでは、形態素を最小単位としているが、日本語などの言語は特に、形態素ごとに区切られた文章ではなく、また、計算機は、形態素のまとまりを認識できない。そこで、自然言語処理をする際に、前処理として形態素解析を行うのが一般的である。形態素解析をすることで、入力された文を形態素毎に区切り、品詞などを決定する。

本研究では、京都大学情報学研究科と、日本電信電話株式会社コミュニケーション科学基礎研究所が、共同研究ユニットプロジェクトで開発した **MeCab**^{*1}[2] という、オープンソースの形態素解析エンジンを実験データの前処理に用いた。

^{*1} <http://taku910.github.io/mecab/>

2.1.3 意味表現

自然言語を計算機で処理するにあたって、計算機が形態素の意味や役割を獲得すれば文や文章など、より複雑な構造を持ったテキストの意味を理解し、それに応じた処理ができるようになることが期待されている。この、計算機で認識するために形態素の意味や役割を何らかの数値で表現したもの、或いは表現することを意味表現という。

この意味表現をどのように与えるかということが問題になる。

2.2 辞書

我々は、未知語の意味を知ろうとする時に検索エンジンを利用して意味を調べるなど、何らかの方法で意味が記述されたテキストを参照する。その参照対象をここでは一括して辞書と呼ぶこととする。辞書を計算機に与えることで、意味を教えることはできるかもしれない。日本語 **WordNet**^{*2}は、計算機で使うことを想定して開発された辞書である。

2.2.1 WordNet

日本語版 WordNet は国立研究開発法人情報通信研究機構（NICT）で 2006 年から 2012 年まで開発されていた大規模な日本語意味辞書である。プリンストン大学で開発された Princeton WordNet と、ヨーロッパの EuroWordNet 協会が推進する Global WordNet Grid に着想を得て開発された。

WordNet では、単語の意味を **synset** と呼ばれるグループで表現しており、各 synset は単語の意味に関する記述と、上位関係や下位関係など、他の synset との関係まで保持しており、synset の情報を用いて単語同士の類似度なども計算できるようになっている。なお、現在の日本語 WordNet の情報規模は以下の通りである。[3]

- synset 数 57,238
- 単語数 93,834
- 語義数：synset と単語のペア 158,058
- 定義文数 135,692
- 例文数 48,276

人手で整備された辞書は単語の意味に関してある程度精密な情報を備えているが、新語や多くの複合語には対応しきれておらず、たとえば、MeCab を用いて日本語版 Wikipedia 全文から抽出された形態素数は 63～84 万程度であった（数字の幅があることに関しては後ほど説明するが、形態素の基本形で数えた場合と、活用された形そのままの場合の 2 パターンで実験をしたからである。）のに対し、WordNet により意味を保持できている単語は 10 万程度であるから、5～7 倍の単語については意味を理解できないということになる。こうした点から、単語・複合語のすべてとすべての意味を収

^{*2} <http://nlpwww.nict.go.jp/wn-ja/>

録し、あらゆる言語処理の応用に耐えうる辞書を作成することは、非常に困難であることがわかる。

2.3 統計的手法

辞書などを作成することで、計算機に単語の意味を明示的に与えることには限界があることがわかった。そこで、現在数多くある、人間が生み出したテキストデータから計算機で自動的に単語の意味を学習・獲得することを考える。以下では、テキストデータを統計的に処理することで獲得する意味表現について述べていく。

2.3.1 分布的意味表現

統計的に獲得する意味表現の一つに分布的意味表現というものがある。
これは、分布仮説

The Distributional Hypothesis is that words that occur in the same contexts tend to have similar meanings(Harris, 1954). (ACL wiki)

” 同じ文脈に出現する単語は、似た意味を持つ。” という考え方によって構築されるものである。[1]

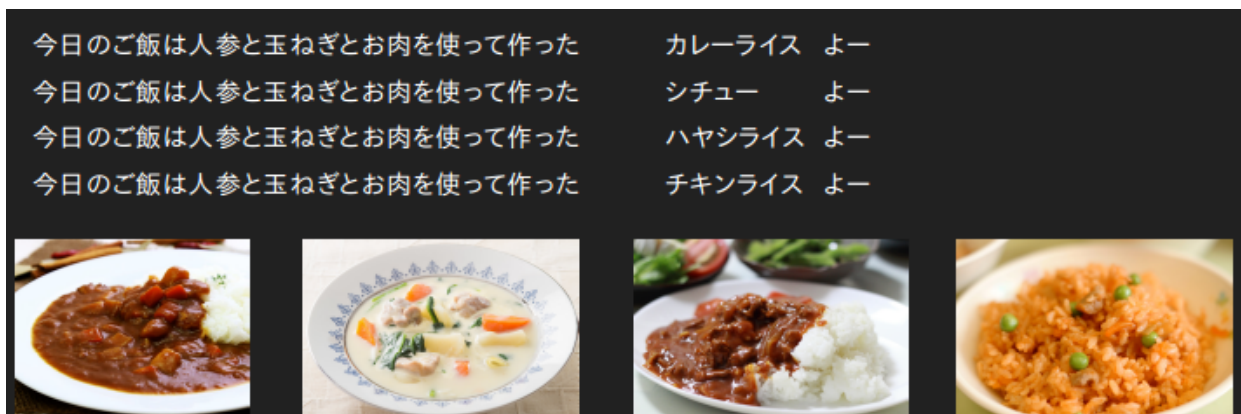


図 2.1: 分布仮説による意味の類推例

上述の例は全く同じ文脈で、似たような料理名が出てくる例文を並べたものである。この時、もしどれかひとつの料理名が全く無知なものであったとしても、それが料理であること、どのような料理であるか、ある程度類推することができるだろう。それは、まさしく同じ文脈に出現する単語であるからに違いない。

この考えに則ってベクトルを作成してみる。例えば、

- 今日の晩御飯は、ジャガイモの入ったカレーライスだ。
- 今日の晩御飯はハヤシライスだ。

という二本の文章を例にして、” カレーライス” と” ハヤシライス” の意味表現を考える。

まず、それぞれの文章を形態素解析すると、

- 今日 \ の \ 晩御飯 \ は \、 \ ジャガイモ \ の \ 入っ \ た \ カレーライス \ だ \。
- 今日 \ の \ 晩御飯 \ は \ ハヤシライス \ だ \。

となる（上では \ によって形態素を区切っている）。

これをもとに、“カレーライス”と“ハヤシライス”に関して、同じ文脈に着目した意味表現ベクトルを作成する。同じ文脈に出現する形態素（これ以降文脈語と呼ぶ）をベクトルの各次元とし、注目する単語と何個の同じ文脈でその次元の文脈語が出現しているかを値としてとると、

- カレーライス = [(今日 : 1), (の : 1), (晩御飯 : 1), (は : 1), (、 : 1), (ジャガイモ : 1), (入っ : 1), (た : 1), (だ : 1), (。 : 1)]
- ハヤシライス = [(今日 : 1), (の : 1), (晩御飯 : 1), (は : 1), (、 : 0), (ジャガイモ : 0), (入っ : 0), (た : 0), (だ : 1), (。 : 1)]

と表すことができる。

ここで、ある単語 x_i と別な単語 x_j が何らかの文脈で同時に出現していることを共起していると言い、何度共起しているかの回数を共起頻度と言う。つまり、上記の例で作成したベクトルは、共起頻度を値として持つ共起ベクトルであると言える。[4] この方法でベクトルを作成する場合は、学習に用いられるテキストの集まり (コーパス) すべてから学習するため、一般に高次元で疎なベクトルが生成される。これは、コーパスに含まれる単語数が数万程度であったり、単語数に対し、単語同士が共起することは一般に多くないためである。

こうして作成される意味表現ベクトルを用いて別な自然言語処理のタスクを行う際、元々のベクトルが高次元で疎なものであるために、学習事例を正しく表現できなくなってしまうなどの問題が発生してしまう。

2.3.2 分散的意味表現

分布的意味表現ベクトルが高次元で疎なものであるという点を避けた学習方法として提案されたのが、分散的意味表現である。

分散的意味表現の学習手法の基本は以下のようになっている。

1. まず、すべての単語に、任意の固定次元のベクトルを割当て、ランダムな実数値で初期化する。
2. 与えられたベクトルを用いて、何らかの予測タスクを解く。
3. 予測タスクを解いた結果に応じてベクトルの値を更新する。
4. 2へ戻る。

分散的意味表現を表すベクトルの各次元は、何らかの実数値変数が持つ値と解釈することができる。この実数値変数が持つ特徴はどのような予測タスクを解くか、固定次元数をどのくらいの値にす

るかなどによって変わると予想されるが、単純な共起頻度が値となるわけではなく、また、他の様々な形態素と次元を共有することから、コーパス中で共起することがない形態素同士の関係についても表現しているものと期待されている。

次章では、本研究で用いた形態素の分散的意味表現学習ツール word2vec で実装されている2種類の予測タスクについて述べる。

第 3 章

word2vec

word2vec^{*1}とは、2013 年に Google の Mikolov らが発表した、単語の分散的意味表現学習ツールである。意味表現学習の過程で解くのは、ある文脈内で共起する形態素を予測するタスクである。文脈が与えられ、次に出てくる形態素を予測するモデルを**言語モデル**と言い、これは、与えられた形態素列がどれほどその言語らしいかを評価するモデルである。

言語モデルでは着目形態素の前方にある形態素のみから次に来る形態素を予測しなければならないが、意味表現獲得を目的とする場合、後方の形態素も予測に使うことができる。よって、 x_1, \dots, x_{i-1} と、 x_{i+1}, \dots, x_n から x_i を予測する。

この章では word2vec に実装されている 2 つの手法を紹介していく。

3.1 実装アルゴリズム

それぞれの手法を紹介していく前に事前に確認しておくが、word2vec では、単語の予測タスクを解く上で、一つの単語に対し、二つのベクトルを設定し、学習を進めている。以下に述べる二つの手法の双方で、同一文脈における単語の共起を、意味表現ベクトルの内積で定義しているためである。

通常同一単語が同一文脈に出現することは稀であり、 x_i に着目した時、 x_i の文脈で x_i が出現する確率 $p(x_i|x_i)$ を小さくする必要があるが、この確率を導出する計算過程で $x_i^T x_i$ を計算することになる。そして、 $p(x_i|x_i)$ を小さくするために、 $x_i^T x_i$ を小さくしなければならない。しかし、この後に述べるが $p(x_i|x_i)$ の導出にはソフトマックス関数という関数を利用しており、これはスケール不変な関数で、 $x_i^T x_i$ を小さくしても値が変化しない。

こうした問題を避けるために、以下の手法中では、用いる意味表現ベクトルを、同じ単語が対象語として現れるか、対象語と共起する文脈語として現れるかによって使い分けている。

3.1.1 連続単語袋詰モデル

連続単語袋詰モデル (Continuous Bag-of-Words model, CBoW model) では、文脈語 (着目形態素と共起している形態素) から着目形態素の出現確率を予測している。

^{*1} <https://github.com/svn2github/word2vec>

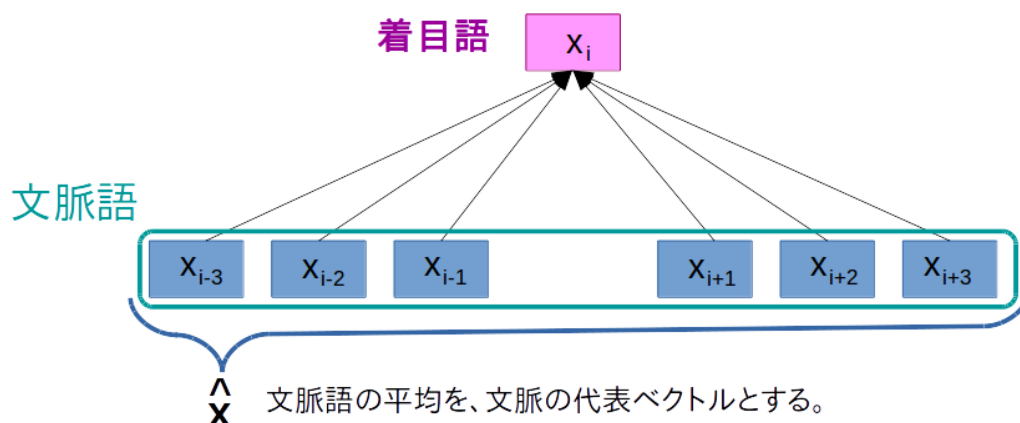


図 3.1: CBoW によるベクトル構築イメージ

着目形態素の前後 n （下図では 3）個の形態素を文脈語とし、文脈語の表現ベクトルの平均を、着目形態素 x_i の文脈を代表するベクトル \hat{x} として、与えられた文脈中に、着目形態素 x_i が出現する確率 $p(x_i|\hat{x})$ は、

$$p(x_i|\hat{x}) = \frac{\exp(\hat{x}^T x)}{\sum_{x' \in \mathbf{v}} \exp(\hat{x}^T x')} \quad (3.1)$$

と表せる。ここで \mathbf{v} はコーパス中の全形態素からなる語彙集合であり、 x' は \mathbf{v} 中の単語である。文脈語の代表ベクトル算出時に語順を無視しているため、同じく語順を無視して文や文書ベクトルを導出する **Bag-of-Words** モデルの拡張とみなすことができる。

式 (3.1) で導出できる確率を学習していく。学習過程については、次のモデルで学習する確率を説明した後述べる。

3.1.2 連続スキップグラムモデル

連続スキップグラムモデル (continuous Skip-gram model, Sg model) では、連続単語袋詰モデルとは逆に、与えられた文脈語から着目形態素の出現を予測するものとなっている。

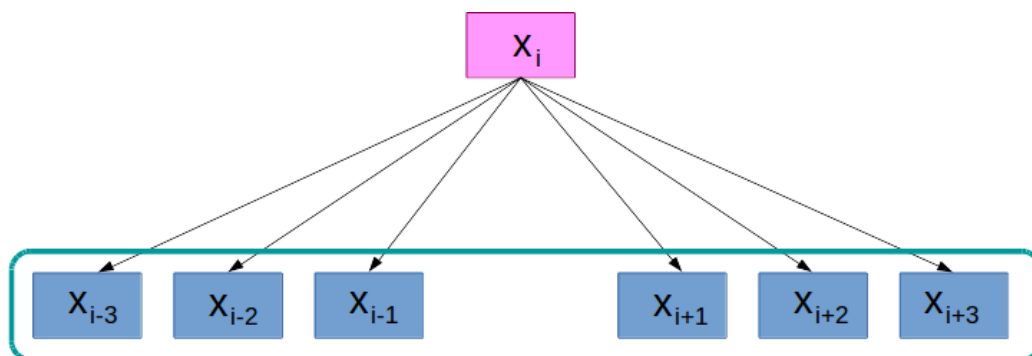


図 3.2: Sg によるベクトル構築イメージ

着目形態素 x_i から文脈語を予測する場合の確率 $p(z_{i-n}, \dots, z_{i-1}, z_{i+1}, \dots, z_{i+n} | x_i)$ は、着目形態素 x_i が与えられた時、文脈語 $z_{i-n}, \dots, z_{i-1}, z_{i+1}, \dots, z_{i+n}$ の出現確立がすべて独立であると仮定して、

$$p(z | x_i) = \frac{\exp(x_i^T z)}{\sum_{z' \in v(x)} \exp(x_i^T z')} \quad (3.2)$$

と表せる。ここで $v(x)$ はコーパス中で着目形態素 x_i と共起している文脈語の集合であり、 z は文脈語ベクトルである。

文脈語の独立性を仮定することで、

$$p(z_{i-n}, \dots, z_{i-1}, z_{i+1}, \dots, z_{i+n} | x_i) = p(z_{i-n} | x_i) \dots p(z_{i-1} | x_i) p(z_{i+1} | x_i) \dots p(z_{i+n} | x_i)$$

と表すことができ、スキップグラムモデルでの確率計算を簡単にしている。

3.1.3 二つの学習モデルの違い

連続スキップグラムモデルでは、一つの着目形態素と一つの文脈語の関係から確率計算を行うので、少ないコーパスからでも一定の精度のモデルを学習できる。これに対し連続単語袋詰めモデルでは複数の文脈語から一つの着目形態素を予測するモデルであるため、複数の文脈語からなる単語列が、コーパス中に複数回出現している必要がある。したがって、連続スキップグラムモデルよりも大きなコーパスデータが必要となる。[4]

3.2 モデルの最適化

本節ではいよいよ、前節で導出した確率の最適化について述べていく。

まず、式 (3.1), (3.2) の右辺はソフトマックス関数 (softmax function) と呼ばれる関数の形になっており、このソフトマックス関数について述べる。

3.2.1 ソフトマックス関数

ソフトマックス関数 (softmax function) は、 N 個の実数出力を、確率値に変換するのによく用いられる関数である。

$$\text{softmax}(x_i) = \frac{\exp(x_i)}{\sum_{j=1}^N \exp(x_j)} \quad (3.3)$$

ソフトマックス関数を持つ特徴として、

- 出力値が 0 から 1 の範囲内
- $\sum_{i=1}^N \text{softmax}(x_i) = 1$ を満たす

というものがあ、これによって出力値を確率値として解釈可能にする。

3.2.2

3.2.3 負例サンプリング

3.2.4 階層型ソフトマックス

第 4 章

梅山氏の提案手法

ノード数が等しい二つのグラフ G , H を比較した際、両者の違いが最小となるようにノードを対応させる問題を、ノードマッチング問題という。本研究では `word2vec` の出力ベクトル空間上にある任意の二つの形態素集合をそれぞれ、各形態素をノードとみなした重み付き無向グラフと考えて、梅山伸二氏の提案手法 [7] でノードのマッチング問題を解くことで相似関係を抽出する。

本章では、梅山氏の提案手法を紹介する。[7]

4.1 グラフの同型性問題

ノード数が等しい二つの重み付き無向グラフ G , H の隣接行列をそれぞれ A_G , A_H とし、行・列の並び替えを行う転置行列を P と表す時、両グラフの違いの大きさを下記の式で定義することができる。

$$J(P) = \|PA_GP^T - A_H\|^2 \quad (4.1)$$

$J(P)$ の値が最も小さくなる時のノードマッチングが最適なマッチングであり、これを満たす P を求める。

4.1.1 グラフ変換

梅山氏の提案手法で無向グラフのノードマッチングを解くに当たり、まず二つのグラフの隣接行列を固有値分解する。

ここからは、元論文に掲載されていた例と同一のものである、下記の二つのグラフを用いて、操作ステップを確認していく。

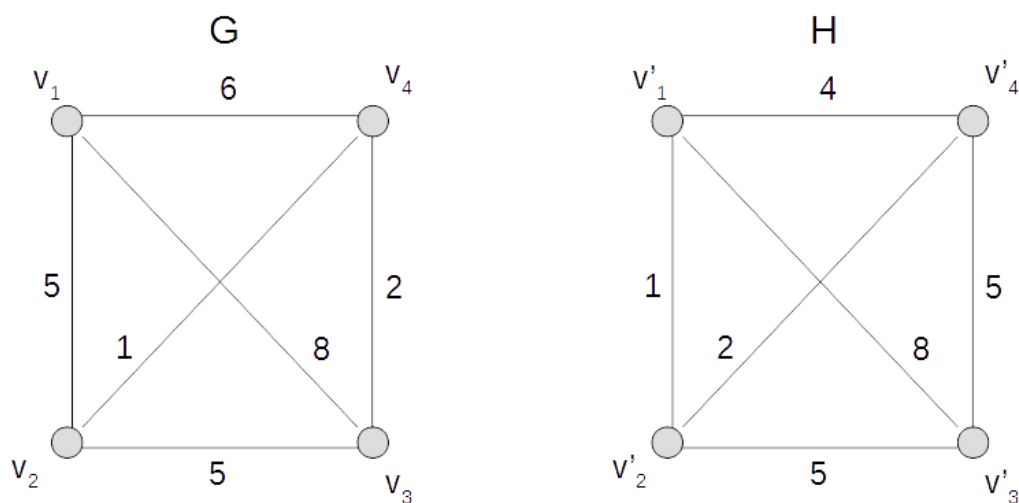


図 4.1: グラフ G、グラフ H

図のグラフから隣接行列 A_G 、 A_H は以下ようになる。

$$A_G = \begin{pmatrix} 0.0 & 5.0 & 8.0 & 6.0 \\ 5.0 & 0.0 & 5.0 & 1.0 \\ 8.0 & 5.0 & 0.0 & 2.0 \\ 6.0 & 1.0 & 2.0 & 0.0 \end{pmatrix}$$

$$A_H = \begin{pmatrix} 0.0 & 1.0 & 8.0 & 4.0 \\ 1.0 & 0.0 & 5.0 & 2.0 \\ 8.0 & 5.0 & 0.0 & 5.0 \\ 4.0 & 2.0 & 5.0 & 0.0 \end{pmatrix}$$

得られた行列 A_G 、 A_H をそれぞれ固有値分解する。この時、固有ベクトルを、対応する固有値の大きさ順に並べたモード行列を U_G 、 U_H とし、固有値を大きい順に対角上に並べた対角行列を Λ_G 、 Λ_H

とすると以下の式のように表せる。

$$A_G = U_G \Lambda_G U_G^T \quad (4.2)$$

$$\Lambda_G = \text{diag}(14.25, -0.28, -4.83, -9.14)$$

$$U_G = \begin{pmatrix} 0.614 & 0.141 & -0.182 & -0.755 \\ 0.434 & -0.528 & 0.726 & 0.079 \\ 0.548 & -0.270 & -0.582 & 0.536 \\ 0.366 & 0.793 & 0.371 & 0.369 \end{pmatrix}$$

$$A_H = U_H \Lambda_H U_H^T \quad (4.3)$$

$$\Lambda_H = \text{diag}(13.26, -0.77, -3.43, -9.05)$$

$$U_H = \begin{pmatrix} 0.538 & -0.436 & -0.425 & -0.583 \\ 0.344 & 0.880 & -0.018 & -0.327 \\ 0.624 & 0.026 & -0.250 & 0.740 \\ 0.450 & 0.187 & 0.870 & 0.079 \end{pmatrix}$$

U_G 、 U_H のすべての要素の絶対値を取ると、行に各ノード、列に各固有値ベクトルが対応させることができる。

$$\bar{U}_G = \begin{pmatrix} 0.614 & 0.141 & 0.182 & 0.755 \\ 0.434 & 0.528 & 0.726 & 0.079 \\ 0.548 & 0.270 & 0.582 & 0.536 \\ 0.366 & 0.793 & 0.371 & 0.369 \end{pmatrix}$$

$$\bar{U}_H = \begin{pmatrix} 0.538 & 0.436 & 0.425 & 0.583 \\ 0.344 & 0.880 & 0.018 & 0.327 \\ 0.624 & 0.026 & 0.250 & 0.740 \\ 0.450 & 0.187 & 0.870 & 0.079 \end{pmatrix}$$

行に各ノードというのはつまり、ノード数4の重み付き無向グラフを、隣接行列の固有値分解により4次元空間上で重みを距離に反映した四つの頂点に変換したことになる。

A_G と A_H が同型であると仮定すると、式 (4.1) の左辺が0になる。よって、

$$PA_G P^T = A_H \quad (4.4)$$

を満たす P が存在する。式 (4.4)、(4.2)、(4.3) より、

$$PU_G \Lambda_G U_G^T P^T = U_H \Lambda_H U_H^T$$

再度、 A_G 、 A_H が同型であるという仮定から

$$PU_G = U_H S$$

を満たす行列 S が存在し、

$$P = U_H S U_G^T$$

と表せる。

求めたい P は順列行列であるから、 \hat{P} を導入し、

$$\hat{P} = \begin{matrix} & \pi(i) \\ i & \begin{pmatrix} \vdots \\ 1 \end{pmatrix} \end{matrix}$$

対角行列を \hat{S} とし、 $U_H = [h_{ij}]$ 、 $U_G = [g_{ij}]$ 、 $\hat{S} = \text{diag}(s_i)$ であることを用いて

$$\text{tr}(\hat{P}^T U_H \hat{S} U_G^T) = \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n s_j h_{ij} g_{\pi(i)j}$$

ここで、

$$\begin{aligned} \sum_{j=1}^n s_j h_{ij} g_{\pi(i)j} &\leq \left| \sum_{j=1}^n s_j h_{ij} g_{\pi(i)j} \right| \\ &\leq \sum_{j=1}^n |s_j h_{ij} g_{\pi(i)j}| \\ &= \sum_{j=1}^n |h_{ij}| |g_{\pi(i)j}| \end{aligned}$$

よって、

$$\begin{aligned} \text{tr}(\hat{P}^T U_H \hat{S} U_G^T) &\leq \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^n |h_{ij}| |g_{\pi(i)j}| \\ &= \text{tr}(\hat{P} \bar{U}_H \bar{U}_G^T) \end{aligned}$$

モード行列 U_G 、 U_H は長さ 1 の固有ベクトルでできた行列であり、各要素の絶対値を取った \bar{U}_G 、 \bar{U}_H の行ベクトルも長さは 1 であるから、 $\bar{U}_G \bar{U}_H = [x_{ij}]$ とした時、 $0 \leq x_{ij} \leq 1$ を満たす。

以上より、任意の順列行列 P は、

$$\text{tr}(P^T \bar{U}_H \bar{U}_G^T) \leq n$$

を満たし、 P が最適マッチングを導く時、 n が最大値となるので、 $\bar{U}_H \bar{U}_G^T$ に、ハンガリアン法を用いることで、最適な割り当てを求めている。

参考までに、ハンガリアン法を用いて求められた P は、

$$P = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

4.1.2 ハンガリアン法

ハンガリアン法 (Hungarian method) とは、割当問題の解法として頻繁に用いられるものの一つであり、 n 次の正方行列が与えられた時、それぞれの行、列に重複が無いように値を選び出し、最小となる組合せを見つけるといった問題を解くことができる。たとえば、「 n 個の仕事を n 人の作業員にやらせる時のコストを考える。同じ仕事を複数人の作業員でこなすことは無く、また、同じ作業員が複数の仕事をこなすこともないことを条件とし、仕事 j を作業員 i がやる時のコストを c_{ij} としたコスト行列 C を入力として、コストが最小になる割り当てを見つける」

グラフのノードマッチングを解く際は、最大となる組合せを見つけることになるが、予め行列の全要素を -1 倍してから最小となる組合せを見つけることにし、最大化問題を最小化問題に置き換えている。

ハンガリアン法は、以下の 6 ステップにより構成される。

1. 各行の最小値を、その行の全要素から引く。
2. 各列の最小値を、その列の全要素から引く。
3. 行列内のすべての0を通るように必要最小限数の直線を引き、直線状の要素に印をつける。
4. 直線の本数 $= n$ であれば、値が0の要素が最適マッチングの位置であり、終了。
5. 直線の本数 $< n$ であれば、印のないすべての要素の最小値を、印がないすべての要素から引き、印が二つついている要素には同じ値を加算する。
6. 4に戻る。

作業員に割り当てる際、作業員毎のコストの差が重要であり、差が同じであれば最適な割当ては変わらない点に注目している。

4.1.3 まとめ

梅山氏の提案手法で想定されている入力は、ノード数が一致しており、構造がほぼ同型なグラフであり、それ以外の、ノード数が一致しなかったり、グラフの構造が大きく異なっているもの同士のノードマッチングの精度は保証されないことに注意する必要がある。

第 5 章

実験と考察

本章では、実験の流れについて説明していく。

5.1 目的

本研究の目的は、word2vec の出力ベクトルを利用して語の相似関係を抽出することであり、この実験では、一对の単語ペアを入力とし、入力単語それぞれの近傍 n 個ずつの単語で作った二つのグループに梅山氏の提案手法を用いることでグループ内の単語同士の対応関係を出力する。

5.2 実験データ

用いた実験データについて説明する。

コーパスとして用いたのは、2016 年 9 月時点での日本語版 Wikipedia 最新記事^{*1}であり、ここからテキストデータを抽出し、MeCab を用いて形態素毎に分かち書きした。

次に、word2vec を用いて分かち書きしたコーパスから形態素の意味表現ベクトルを学習した。ベクトル学習のハイパーパラメータは以下の通りである。

- 適用手法 : CBoW
- 学習するベクトルの次元数 : 200
- 文脈窓 : 8
- ネガティブサンプリング :
- 階層型ソフトマックス :

文脈窓は、学習する際に使用する、対象語の前後の文脈語数で、今回文脈語は全部で 16 個使っている。

^{*1} <https://dumps.wikimedia.org/jawiki/20160901/jawiki-20160901-pages-articles.xml.bz2>

5.3 予備実験

5.3.1 梅山氏の手法の有効性確認

まず初めに、word2vec の出力ベクトルデータを元に、単語同士の相似関係を梅山氏のグラフノードマッチング手法を利用して抽出できるかどうかを確認した。

用いた単語群

表 5.1: 手法の妥当性確認のためのテストデータ

集合 X	集合 Y
叔父	妹
王	祖母
老人	王女
父	雌
兄	老婆
祖父	花子
弟	姉
息子	叔母
雄	娘
太郎	母

表 5.2: テストデータのノードマッチング解析結果

集合 X	集合 Y
叔父	叔母
王	王女
老人	老婆
父	母
兄	姉
祖父	祖母
弟	妹
息子	娘
雄	雌
太郎	花子

男という括りにできる単語グループXと、女という括りにできるグループYを、それぞれ対になる単語が含まれるように作成した（例：父-母、雄-雌）表 (5.1) である。もう一方の表 (5.2) は、ノードマッチングを適用した結果である。

word2vec が出力した各単語のベクトルを、それぞれ行ベクトル $x_i \in X$, $y_i \in Y$ とすると、 U_X , U_Y は以下のように表せる。

$$U_X = \begin{pmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} \quad U_Y = \begin{pmatrix} y_1 \\ \vdots \\ y_n \end{pmatrix}$$

U_X , U_Y はそれぞれ、第4節で述べた U_G , U_H に対応する。

グループXの単語と、グループYの単語は、それぞれのグループにおいて、重み付きグラフを重みを二点間の距離に反映してベクトル空間上に埋め込んだものとみて、 U_G , U_H の代わりに U_X , U_Y を用いて、梅山氏の提案手法を適用した。

グループX, Yに関して、梅山氏の提案手法によるノードマッチングを適用した結果が表 (5.2) の通りである。

5.3.2 着目形態素の近傍形態素の様子

まず初めに、入力された単語対それぞれの近傍単語から取得した単語で作成したグループ同士が同型になっているかどうかを確認するために、いくつかの単語対に関して近傍単語を調べた。

表 5.3: (王, 女王) の近傍単語

王	女王
は王	王女
皇帝	王妃
に王	国王
国王	エリザベス女王
君主	ヴィクトリア
大王	王
王妃	王子
伯	エリザベス 1 世
聖王	エリザベス 2 世
女王	王配

表 5.4: (日本, アメリカ) の近傍単語

日本	アメリカ
韓国	米国
日本国内	イギリス
台湾	英国
中国	カナダ
欧米	アメリカ合衆国
海外	ヨーロッパ
日本の文化	オーストラリア
日本国外	フランス
アジア	ドイツ
わが国	キューバ

表 (5.3) に関して、下図にあるような、(男, 女) の関係に相当する単語が出力されることを想定していたため、この時点では大きな誤算である。

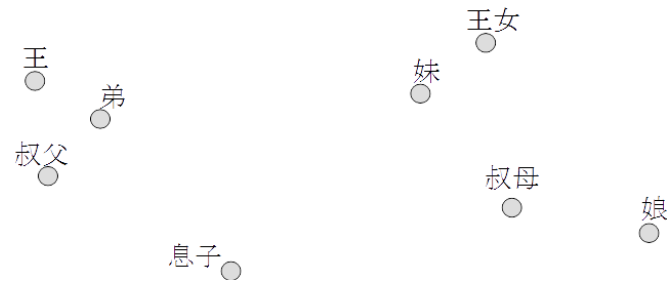


図 5.1: 王-女王 近傍イメージ

表 5.5: (明るい, 暗い) の近傍単語

暗い	明るい
明るく	暗く
暗く	明るく
濃い	薄暗い
淡い	眩しく
眩しく	青白い
青白い	濃い
淡く	薄暗く
明るめ	淡い
鮮やか	ぼんやり

表 5.6: (光, 影, 闇) の近傍単語

太陽光	影の	暗黒
反射	闇	妖魔
発光	暗闇	魔物
光線	暗部	邪悪
鏡	影	魔神
光源	暗い	影
紫外線	隠れ	悪魔
い光	暗黒	魔王
透かす	其面	魔界
太陽	潜む	魔

以上の結果を見るに、単純に近傍単語を同数取ってきたグループで作成するグラフは、与えた単語対が持つ関係を保持した同型のグラフには必ずしもなっていないようである。

第 6 章

結び

謝辞

本研究を進めるにあたって、特別な事情により普通よりも長い期間、丁寧にご指導いただきました原口先生に心から御礼申し上げます。長い期間の在籍も、研究室内でサポートくださいました大久保先生、配属時の事情など御心配戴きました吉岡先生にも、厚く御礼申し上げます。

研究を様々な面でサポートしていただきました先輩方、研究室の皆様にも大変お世話になりました。

未熟な私がここまでやってこれたのは、サポートしていただきました皆様のおかげであり、すべての方々に感謝を申し上げます。

平成二十八年 二月

平田 泰樹

参考文献

- [1] J.R.Firth. A synopsis of linguistic theory 1930-55. Studies in Linguistic Analysis, pp.1-32, 1957.
- [2] MeCab: Yet Another Part-of-Speech and Morphological Analyzer.
<http://taku910.github.io/mecab/>, 2013.
- [3] 日本語 WordNet
<http://nlpwww.nict.go.jp/wn-ja/>
- [4] ダヌシカ ボレガラ, 岡直観, 前原貴憲 機械学習プロフェッショナルシリーズ ウェブデータの機械学習. 株式会社 講談社, 2016.
- [5] 宮崎修一 グラフ理論入門 基本とアルゴリズム 森北出版, 2015.
- [6] 喜多陵. 記述の構造類似性に基づく法的観点と判例のマッチング. Master's thesis, 北海道大学大学院情報科学研究科, 2014.
- [7] 梅山伸二 An eigendecomposition approach to weighted graph matching problems. IEEE TRANSACTIONS ON PATTERN ANALYSIS AND MACHINE INTELLIGENCE, pp.695-703, Sep, 1988.